

一九六八年闘争と 内ゲバ主義の克服（前編）

国富建治（週刊「かけはし」編集委員会）

七〇年代の学生運動・社会運動は、連合赤軍事件の惨たんたる衝撃、革共同両派の泥沼のような内ゲバ戦争によって、ほぼ壊滅的な状況だった。という概括はしかし、七〇年に活動をやめた人たち、あるいはメディアが好んでする筋書きにすぎない。

現実には京大同学会の運動（本誌二〇一八年秋号、伊藤公雄・市田良彦の

論考を参照されたい）のほかに、全共闘運動を追体験する流れは少なくなかった。たとえば本誌にも関係する当時の情況派（共産同再建委）でいえば、ノンセクトの学生団体を糾合した二六実行委員会という流れがあった。ほかにもいくつかのノンセクトの流れがあった。ノンセクトだけではない。党派においても、内ゲバ主義反対が青年

学生の心をつかみ、大きな奔流となつて政治危機をつくり出した。第四インターを主流とする、七〇年代中期の大衆的な実力闘争である。

この「新左翼運動クロニクル」は、六八年革命の残骸の中から、七〇年代中期以降九〇年代に至るまで、六八年を追体験してきた世代の生身の証言である。シリーズの第一回目は、第四インターの国富建治さんに証言をいただいた。



第四インターの 闘い

昨年、二〇一八年は全共闘運動五〇年ということでメディアの世界でも一定の取り組みがあった。その中で、あらためて新左翼運動とは何か。とりわけ一九六八年反乱の世界的意義についてもう一度問い直そうとする試みがなされた。私もピープルズ・プラン研究所のシンポで少し話したが、マニラのフィリピン大学でも「1968反乱」五〇年をテーマにしたシンポジウムで話す機会もあった。同大学のシンポではフランスの五月革命について当時のJCR（革命的共産主義青年同盟）の中心的活動家だったピエール・ルツセ、韓国の活動家（一九六〇年の李承晩独裁を打倒した世代ではないが）と共に、私も自分の体験を中心に報告した。地元のフィリピンからは後にCOP（いわゆるシンソンの派のフィリピン共産党）のゲリラ戦を闘い、現在はCOPから離れた古参の活動家も参加した。東京では、ピープルズ・プラン研究所（PP研）が企画した、「一九六八

年から五〇年」についての討論会にも参加して発言する機会もあった。この時クローズアップされた問題は実力闘争―「武装闘争」あるいは「内ゲバ」というテーマであった。総じて「政治的暴力」というテーマについてどう考え、論じるべきかという課題でもある。この点では、私自身も当事者の一人であることは間違いない。

なお「内ゲバ」については、私たちには「特殊日本の病理」として捉える傾向もあったが、最近はずいぶんそのように限定されるべきではなく、広く政治運動、宗教運動をふくむ革命運動に共通のテーマではないか、と考えている。

純「戦後世代」の血闘史

もう七〇歳を超えたことだし、とりあえず自分史的に語ろう。私は、一九四八年に生まれ、一年浪人して一九六八年に大学に入った典型的な「全共闘」世代―「団塊の世代」に属している。

生たちが「岸クン、ハワイで待つてるぜ 李承晩」と書かれたプラカードを持つていたことを覚えている――というより何度か人に話しているので無理やりそのエピソードを記憶に残すことになった、と言うべきか。当時家でその話をしたら、すでに社会人になっていた長兄が「なかなかいいセンスしているね」と評したことも覚えている。兄は政治へのかかわりを意識的に拒否する、どちらかと言えば保守的な人だが、それでもそうした態度は世間的に広がっていたのだろう。

後日、一九七一年七月の三里塚闘争で逮捕された時、警察の同じ拘留房にいた窃盗犯の男から、「一九六〇年安保で樺美智子さんが殺された時、俺も、当時は労組員で、喜んでデモに行っていたことを覚えてるよ」と言われたことがあった。もう一人の同僚のヤクザは、「俺は組の兄貴に言われて棒を持つてデモ隊を襲う側だったけれど、別に憎くてやっていたわけじゃない」と弁

小学校三年時の担任の女性の先生は、一九五八年の勤労闘争でストライキに入ることを、子どもたちにも宣言するような人だった。「このままだと今の政府は、また戦争することになっちゃうよ」。教師の影響は大きい。クラスのみんなは、このストライキ宣言に拍手を送った。

小学校四年の時の担任の男性教師は、バリバリの活動家で、後に共産党の区議になったような人だったので、彼も子どもたちに「政治的外部注入」というしかないような教育をしていた。折から明仁と正田美智子の結婚ブームに沸いた一九五八―五九年、この教師は「初めての『平民』の娘との結婚として評判になっているが、ミチコは日清製粉の社長という資本家、金持ちの娘で、決して私たちの仲間なんかではないよ」と子どもたちに教え込んだ。また小学生の私たちに、共産党の代議士で、後にソ連追隨派として除名になった志賀義雄が、爪をはぐような官憲に

明していた。それを聞いてなるほど六〇年安保は「国民的闘争」だったんだ、と改めて確認した次第だ。

さて、六〇年安保を中学一年生、あるいは小学六年生で迎えた「団塊の世代」にとつて一九七〇年の安保闘争では、大人になった自分たちが運動の当事者になるという意識がなんとなく頭の隅に入っていたような気がする。

ロシア革命五〇年と初めてのデモ

私が、はじめてデモに参加したのは、一九六七年十一月、浪人して駿台予備校に通っていた時だった。ちょうど一〇・八羽田闘争で私と同年の京大一年生の山崎博昭さんが虐殺された直後だった。その頃、「ロシア革命五〇年」で、一九一七年の一〇月蜂起に参加した老兵たちがまだ健在で式典に参加している映像もTVで流れていた。

ところでこの一〇・八羽田闘争の裏で、デモの主導権をめぐる中核派に

よる取り調べ中の拷問にいかにも耐えなさを語ったりもした。

一九六〇年の安保闘争の時、私は小学校六年生だったが、その頃になるとテレビが多くの家庭に普及するようになり、ニュースでは連日のように全学連をはじめとする国会デモの映像が流れていた。学校では休み時間の運動場で「デモごっこ」もやられていた。小学校の上級生ともなると、そうした世の中の動きがクラスの中でも話題に上っていく。

一九六〇年六月の安保闘争の高揚の時、一度だけデモ隊の姿を見たことがある。ちょうどその頃、韓国では李承晩（イ・スンマン）独裁体制が、韓国の学生たちを中心とする連日の激しいデモによつて倒れ、李承晩はハワイに亡命するという事態になっていた。韓国と日本の闘いは同時に連動していた。そのことが当時の左翼に、どれほど意識されていたかは分からない。

しかし早熟だった私は、その時、学

よる三派全学連の高橋孝吉書記長（社青同解放派）への凄惨なリンチが、中核派の拠点であった法政大学内部で行われたのである。このテロ・リンチは中核派（革共同）の政治局、とりわけ清水丈夫政治局員の直接指導の下に行われた計画的テロ行為であった。中核派に所属していた京大一年生・山崎博昭さんの警察機動隊による虐殺への怒りと抗議によつて、この凄惨なテロ・リンチがあまりにさされてはならない。このころまで、私はまだ「新左翼」を知らず、左翼と言えは共産党だと思っていた。新聞などで早稲田の学費値上げ反対ストを報じる際、「反日共系」という言葉も使われていたが、「反日共系」というのは右翼のことだと思っていた。

一方、中国文化大革命で「紅衛兵」が登場し、「実権派」への暴力的な攻撃・糾弾を行っていた時期でもあった。私は、「紅衛兵」運動にはいかなる共感も持てなかった。「老人」への「若者」

による糾弾に疑問を抱いたわけではなく、その批判の自身がわからなかったのである。受験勉強をしながら、深夜のラジオで「文革」華やかなりし時の北京放送を聞いていたりもしていたが、どうしても「実権派」断罪の理由に納得いかなかったのだ。

私が、初めて参加したデモは、確か「安保放棄・沖縄・小笠原の無条件返還」を訴える共産党系の「安保放棄・諸要求貫徹」実行委員会が主催で、会場は代々木公園。おそらく数万人が参加していた。当時、民青系の「全都予備校生連絡会議」という組織が存在し、友人に誘われてその隊列に加わった。集会の内容は記憶にないが、一九六七年一月のその集会では、三里塚芝山連合空港反対同盟の代表も発言し、さらには日本山妙法寺の僧侶たちも参加していた。たしか三里塚反対同盟が共産党と絶縁するのは一九六八年になってからだ。

初めて体験したデモは、代々木公園

ト派)、安保体制打破同志会(社会党中国派)文革派の岡田春夫グループ)、ベ平連(故井上澄夫氏など)などだった。中核派や革マル、ブントといった大手新左翼の活動家フラクションのよくなものは見当たらなかった。「一橋新聞」は当時、大判で月二回刊行しており、新聞の水準は高く、学内・学外の知識人も執筆していた。新聞会の社屋は、一橋大の前身である旧東京高商発祥の地である神田・一橋にあった。私が初めて、神田一橋の新聞会を訪れた時、当の新聞会のキャップが「いまクロカン(黒田寛二)から電話があったよ」と話していたことを覚えていて。六〇年頃から寄稿していたというが、さすがにびっくりした。

私は、革新会議のメンバーだったこととは異なるが、同会議の活動家の中には中核派のシンパやブント(社学同)のシンパもいたはずであり、革新会議は非日共系を束ねる位置にいた。こうしたあり方から言って、私は、民青系も

から新宿の花園神社前までだった。ところがこの民青系の「全都予備校生連絡会議」の約二〇〇人程度の隊列の中から、「中国文化大革命万歳」とのシュプレヒコールも上がった。「ナンセンス」の声で、そのシュプレヒコールはかき消されたが、このころはまだ「文革」にシンパシーを感じる層が、共産党系の中にもいたのかもしれない。確か、高校三年の時(一九六六年)に、共産党員の(だと思う)国語の教師が「俺はもともと中国共産党のファンなんだけど、なんであんなになっちゃったのかな、と嘆いていたことも覚えている。

私はこの後、次第に民青と距離を置き、駿台予備校の仲間数人と初期マルクス学習会(「経済学哲学草稿」や「ドイツイデオロギー」)を訳も分からぬうちに「ああでもない、こうでもない」と言いながら始めるようになった。一九六八年一月の米原子力空母エンタープライズ佐世保入港反対阻止の闘いは、

ふくめた内ゲバ現象にほとんど関わらずに済むという例外的に「幸福」な六年〜六九年を経験しえたのだろう。大学に入って最初に参加したデモは、六月十五日の樺美智子さんの生命が奪われた記念日集会で、日比谷野音が会場だった。一橋大からは二〜三〇人が参加した。しかしこの時は誰もヘルメットをかぶっていないかった。たしか東京地評青年協あたりの主催だったのではないか、と思う。ところが中核派が秋山勝行全学連委員長の発言を求めて日比谷野音の演壇を占拠し、それに対して革マル派が旗竿を構えて対峙して衝突するという事態になり、結局集会は中止になって、そのままデモに出るといふなんともみじめな結果となった。

その後、夏休み明けの一橋大では一〇・二一の国際反戦デーにストライキで参加しようという機運が高まった。そのためには学生大会を開いてスト決議をしなければならぬ。ところが前

私が最終的に民青から離れる契機となった。この学習会は、一九六八年にそれぞれが大学に入ってからもしばらく続いた。

ぬるま湯的な全共闘体験

一九六八年四月、私は一橋大学社会学部に入學した。東京都国立市と小平市(小平キャンパスは教養課程)にある一橋大学は、経済、商、法、社会の四学部合わせて学生数が一学年で七〇〇人強、全学で三〇〇〇人弱という、比較的小規模な大学だった。

前期(教養)自治会と後期(三〜四年生)学生会の執行部はいずれも共産党・民青系であり、反日共系の中心は革新会議(広義の三派全学連支持の活動家フラクション)で、中心になっていたのは一橋新聞会のキャップで第四インター系の社青同国際主義派のメンバーで、学内には彼以外に国際主義派の正式メンバーはいなかったかもしれない。それ以外に共闘会議(フロン

期(一・二年の教養課程)の小平キャンパスでは数年間にわたって学生大会そのものが成立していなかった。自治会の執行部は民青だったが、クラス代表からなる評議員会では非民青系が勝つ可能性があった。私は、クラス代表評議員に選ばれ、評議員会の副議長にも選出された。全体として前期自治会評議員会では非民青が多数となった。そして学生大会も数年ぶりに成立し(在籍学生の五分の一以上で成立、前期の学生総数は約一五〇〇人で三〇〇人以上の出席で成立となる)、民青系自治会執行部案が否決され、一〇・二一「ベトナム反戦一日バリケードスト案」が成立した。このころになると民青系自治会が、運動のイニシアティブを新左翼系に取られてしまう傾向が、一橋大のような学生運動の「後進大学」でも見られるようになった。

この時の中心テーマとして、新宿駅を通る米軍用の燃料輸送車両を止める、という具体的な目標があった。実は一

○・二一の前に、「一〇・八羽田闘争一周年」の集会在、日比谷野外音楽堂で開催され、この時も、集会後に新宿駅に向かつてジェット燃料輸送を止め、という行動は行われた。私もこの行動に参加し、新宿駅近くで警察との投石戦となった。私は、後から飛んできた石が頭に当たり出血してしまい、危うく逮捕されそうになったが、助っ人が現れて、なんとか助かった。

そして一〇・二一ストライキの日は前夜からバリケードを学内の要所に構築し、キャンパスに入ろうとする教員を追い返し、意気揚々とスト突入集会を行った。確か、この時、教員から連帯のあいさつを行ったのが、若手教員の代表ともいえるフランス語担当の海老坂武さんだった。

午後、私たちは「新宿米車タンク車阻止」を実現するために御茶ノ水の中中央大学館に向かった。中央大学館での集会後、中央線の電車に乗り代々木の駅で非常コックを開けて、中央線のレール

翼の原点とは何かということに立ち返って、論議せよということなのかもしれないが、今から考えても、とても無理がある組み合わせだ。

この合宿は、そのまま「東大安田講堂決戦」に連動することとなった。東大安田講堂決戦は一九六九年一月十五日の「安田講堂前集会」で火蓋が切られる。ついでに言えばこの日は私にとつての「成人式」の日でもあった。前日から東大本郷キャンパスには当時の社青团国際主義派（インター系）も全国から総力動員をかけていた。法文二号館のバリケード封鎖が、インター系の担当だった。ナチスドイツの研究で著名な篠原一氏の研究室も含まれていた。彼の研究室の机の引き出しの中には、いくつもの写真資料が含まれていた。頑丈な金属製の机は、バリケードを作るために横倒しにされ、引き出しもすべてバラバラにした。機動隊の放水などの結果、ここで戦前ドイツについての研究資料が封鎖の際に破棄・

ルの上をデモして新宿駅に向かうのである。駅の方から機動隊が走ってくる。私たちは線路の塀をよじ登って、道路側に飛び降り、JR新宿駅に向かった。すると市民と言うか、群衆と言うか、野次馬と言うか、とにかく多くの人々が待ってましたとばかりに拍手で迎え、一大集会となった。ここに集まったのは党派で言えば中核派、革マル派、ML派、そして第四インター系という組み合わせだったが、それ以上に圧倒的多数がサラリーマンだったり、「市民」だったりという人びとだった。そしてこの解放区的状況に「騒乱罪」が適用されたのである。

私たち、一橋大の部隊は、学生大会での「一日バリケードストライキ」の約束を忠実に履行するためには、とにかく小平キャンパスに戻って、バリケードを解除しなければならぬ。しかし中央線は止まっている。そこで動いている西武新宿線を使って急いで戻らなければならぬ。そして徹夜

破損されたことで丸山真男教授に「ナチスでさえやらなかった蛮行」として非難されたことは有名な話となっている。私もその「蛮行」をした張本人の一人である。

ここで一九六九年の一橋大学の闘争について簡単にふれておきたい。このあたりは当時、新進の助教教授だった海老坂武の『かくも激しき希望の歲月 1966〜1972』（岩波書店 二〇〇四年）から引用する。

「一橋大学で紛争が始まったのは、やつと六九年五月に入ってからである。全国的に見ると始まりは遅い方だった。国立と小平に校舎のある一橋大学では、政治的興奮も学食の値上りもファッションも、都心の大学にくらべるとワシントンポ遅れてやってくる。これを三多摩格差という、という解説をそれ以前に誰からか聞いたことがあった。たしかにこの大学にはどこか田舎風のものびりしたところがあつたのだ。」

「一橋の紛争が重大な局面を迎えたの

でバリケードを解除しよう。その通りに、翌日の授業に合わせてバリケードは撤去したのである。ただし、後に、中核派の隊列に参加して逮捕されていた一人の学友が騒乱罪を適用されて起訴されたことが分かった。

一橋大学の一九六九年

一九六九年の正月、私は「三派系フランクシオン」としての「革新会議」が秩父でやる合宿にオブザーバー的に誘われた。秩父の民宿で行われたこの合宿の素材がユニークだった。トロツキーの「一〇月の教訓」、黒田寛一の『組織論序説』、そして社青团解放派の創始者である滝口弘人の「共産主義Ⅱ革命的マルクス主義の旗を奪還するための闘争宣言」（解放派結成に当たった綱領的文書）の三つがテキストになったのである。この三つで、どんな討論ができたのか、私は何一つ覚えていない。それなのに三つが教材だったということだけ覚えている。まあ新左

は、六九年五月一七日、全学闘争委員会と名乗るグループが、国立本校の本館を占拠し封鎖して以後である。彼らは交渉権の問題をめぐって大学当局との団交を求めていたが、自治会ではないということ、大学当局は団交を拒否した。これを不満として彼らは実力行動に走ったのである。」

「政治色から言えば、自治会は代々木系であるのにたいし、全闘委は反代々木系ということになっていたが、占拠一封鎖に参加した学生の大部分は、どのセクトにも属していないノン・ポリ学生だったというか、この時期の大学では、ノン・ポリ学生も少数のネトライキ組をのぞけば、代々木系か反代々木系か、旗印を鮮明にすることが求められていたのだ。その選択は、ある者は確信をもってなしただろうが、友人とのつながりや、その場の勢いでぼんやり決めてしまった者も多量いたはずである」。この評価は、おおむね正しい。海老坂と並んで、「造反教官」の一

地域、すなわち北海道（北大、北海道園大、室蘭工大、旭川大など）から北陸（新潟大、金沢大）、中国（広島大）、九州（九大、九工大、福岡大など）まで、かなりの広がりをもって拡大する。

この過程の中で、忘れられない活動の一つは、学生インターとして、一九七二年に起こった早大生・川口大三郎さんの革マル派によるリンチ・殺害事件を糾弾し、革マル派による暴力支配から早大を解放する早大生自身の運動を支援する全国的な闘いに関わったことだ。私自身、実家の一室を早稲田大学の活動家の会議の場所として提供したこともあった。学生インターの拠点だった芝浦工大大宮校舎に対して革マル派の部隊が押し掛けたとき、自治会の活動家は全学放送で、革マル派部隊の襲撃について報告し、授業中にもかかわらず一〇〇〇人に近い学生が出てきて革マルを包囲・追放する闘いも展開された。

一つの政治的傾向として大衆の眼前に提起されている。そしてそれが大衆を通じて一定の見解を提供する判断の材料として政治の舞台上に登場しているのである。

「しかしながら、すでに本格的な現象として存在しているこの『内部ゲバルト』問題に対し、それに主体的にかかわっている新左翼諸党派のどの一つも、いまだかつて労働者学生大衆の前で自己の見解を公表したことはない。そのためかかる『内部ゲバルト』によって引き起こされる、新左翼諸潮流に向けて大衆の政治的不信や、諸党派自身の政治的弱さを大胆に切開し、克服する努力は全く手をつけられないままに終わっているのである。」

「我々は、階級闘争の実践に検証された論争をプロレタリア民主主義内部の

そして川口君虐殺一周年の一九七三年一月八日、早大周辺での「川口君虐殺一周年」の早大生による行動を、学生インターは全国動員で防衛し、支援する活動を繰り広げたのである。私たちは、この闘いをあらゆる「内ゲバ主義に明確に反対する闘い」と位置づけた。私たちは、たんに少数派だったから多数派セクトによる内ゲバに反対した、ということではない。この内ゲバを通じた拠点大学における他党派排除による「自治会利権」をも伴った支配のあり方こそ、学生運動の大衆的エネルギーを損なう要因である、ということを主張していたのである。

先に述べた一九六七年一〇・八羽田闘争前夜の清水丈夫（革共同政治局員）をはじめとし、本多延嘉革共同書記長をふくむ中核派最高指導部による高橋孝吉・三派全学連書記長（解放派）への凄惨なテロ・リンチがあつたことを忘れてはならない。中核派によるこのテロ・リンチは、三派全学連の主尊権

党派闘争の基本手段として確認するものである。我々はいわゆる『内部ゲバルト』が、かかる論争を進展させ、大衆を根底的に獲得する自覚過程では全く不必要で、妨害物であると考える。我々自身、そのようなこそくな手段に頼るべき何の理由も持ち合わせてはいない。

「同時に我々は、我々の運動が他党派のゲバルト的手段によって、大衆運動に登場することを不当に制限された場合にのみ、対抗的防衛的暴力を使用する権利を留保するだろう。／同時に我々は、かかる『内部ゲバルト』の行使者に対しては、全面的に大衆に向かつて問題を明らかにし、彼らが孤立し、心から自己批判するのになければ一瞬も自己の党派を維持できなくなるような、大衆の活発で積極的な政治的雰囲気形成するために闘うであろう。」

私たちはこの「内ゲバ反対」の立場は、決して都合主義的なものでは

をめぐる党派的思想に発する、許しがたい行動だった。ラディカルな青年学生運動の発展の裏側で、その意義をそこなう党派的で理不尽きわまるテロ・リンチの横行は確実に、権力に対決する闘いの意義をむしろ、青年・学生たちを闘いから遠ざける利敵行為に他ならない。その党派的な暴力は、体を張って権力の理不尽に立ち向かう極めて反動的な役割を果たすものだ。すでに一九六八年六月の段階で、第四インター日本支部の政治機関紙「世界革命」（復刊六号）は織田進の「内部『ゲバルト』反対」と題した論文を掲載している。

「我々はこのような『内部ゲバルト』問題を、党派闘争にありがちな『行き過ぎ』として、偶発的な事件として簡単に見過ごすことは、もはや許されないと考える。活動家の間の『笑い話』や『手柄話』でお茶をにごしてすませていることは、すでにこの『内部ゲバルト』があまりにも日常的で、重大な、

なく、スターリニズムによる独裁支配体制がソ連で確立されていく中で、虐殺されていったトロツキーをはじめとする左翼反対派の血の体験をベースにしたものである、と教え込まれていたこの点では、スターリニズムとの闘いの「総括」を、プロレタリア民主主義の破壊という点でもう一つの「他党派解体」の暴力支配に集約していった「反スターリニズム」理論への批判が原点だったのである。

東北大学での解放派の「党派闘争」

全共闘運動に代表される戦闘的學生運動が衰退し、新左翼運動が、その「内ゲバ主義」的誤りと混乱の中で、セクト主義的分解を進めていく中で、第四インター系が一九七五年に勝利の果実をもぎとったベトナム・インドシナ革命連帯運動や、一九七八年の三里塚管制塔占拠闘争において重要な役割を果たすことができたのは、「内部ゲバル



77年5月15日、代々木公園での三里塚集会

評社刊（2003年1月）に掲載した私の文章から引用する。
……医学連、京大同学会、東北大全教養部連合（全C連）が呼びかけた実行委員会に、私たち第四インター系は各大学自治会（当時、弘前大、秋田大、山形大、芝浦工大、上智大、九大で六大学九自治会共闘をつくっていた）を中心に、この実行委員会に当初から参加した。この集会の中心は二月一〇日に行われることになっていた東北大での集会とデモだった。しかし当時の東北大では、党派としては解放派が中心勢力であり、解放派は『革共同三派（革マル、中核、第四インター）』の登

場を許さない」という姿勢を取っていた。東北大のインター系活動家は新聞会などのサークル・メンバーとしてしか、公然とした活動はできなかったのである。
「呼びかけ団体である医学連と京大同学会は、仙台での集会とデモが行われる前日の深夜に私たちに『解放派がインターの登場を実力で粉碎すると言っている。参加を見合わせてほしい』要請してきた。すでに仙台への全国動員を行っていた私たちの学生部隊は、この要請を理不尽なものとして拒否し、当日を迎えることになった。解放派との衝突は不可避となった。私たちは大

ト主義」への徹底的な批判とその克服のための闘いが大きな要因だった。
この時代、第四インターナショナルの世界的潮流は、ベトナム・インドシナ革命運動の勝利に向かつての前進と帝国主義本国における反戦運動、青年・学生の戦闘化、などをベースに大きな成果を獲得し、発展していた。それは、社会的には戦後生まれの「団塊の世代」の未来への希望への表現であり、一九七五年のベトナム革命勝利に示される「帝国主義支配」の危機がもたらす攻勢的気運を体現していた。しかし、私はここで今、あらためて考えなければいけないことが幾つかあるように思える。

その一つは一九七六年二月に東北大学での反処分闘争勝利と国公立大学費値上げ粉砕を掲げた医学連、京大同学会、東北大全教養部連合（全C連）が呼びかけた集会にかかわる問題である。
以下、『検証 内ゲバ PART2』（いいだも 蔵田計成編著 社会批

量の竹竿などを準備しこの衝突に備える体制を取っていた。「当日の行動は、早朝からの東北大片平校舎での集会の後、川内校舎へ向かうデモとして展開された。私たちは、ノンセクト系からやや離れる形でデモの最後尾につけた。デモが川内校舎に入る時、坂の上から解放派の部隊約六〇人が私たちにビンや石を投げつけ、角材や鉄パイプをふるって攻撃してきた。私たちも坂下から応戦した。そこへ背後から機動隊の放水車が水を浴びせて衝突は短時間で終わった。実行委員会の総括集会では、私たちの発言はノンセクトからの猛然たる野次に見舞われた。」

私は当時の実感からこう記述したが、この「猛然たる野次」は、ノンセクトによるものではなく、日本学生戦線や、ブント系などの明らかに党派的なグループによるものだ、ということも後から指摘されて知ることになった。当時は学生の共同行動の延長に、全学連の再建まで展望していた（明文化す

るのは八〇年代)。私たちには「党派闘争」を理由に、この共同闘争から離脱する選択肢はありえなかった。自衛のために最低限の武装が「内ゲバ主義反対」と矛盾するものではない。いずれにせよこの東北大闘争での苦い経験は、学生運動力の戦闘性を三里塚開港阻止闘争での実力闘争に私たちが舵を切る、主体的要因となったのである。

全国的な布陣で 三里塚決戦を準備

前掲書で私はこう書いている。

「私たちは、『内ゲバ主義一掃』の闘いが戦闘的大衆運動の発展そのものの中で実現されることを強調していたが、ここでは解放派の『内ゲバ主義』との闘いが、『党派間の対立』としてしか表現されない構造を突破できなかったのである。この点は、一九七二～三年の早大での早大での『革マル支配』に対する闘いと、歴然たる相違であった」。大衆運動情況の急速な悪化の中

で、『内ゲバ反対』は私たちのまさに『党派的』で孤立した行動としてしか表現されなかった。こうした状況の突破をかけて、私たちはその後、一九七〇年代後半の三里塚開港阻止決戦に全力を投入することになる。そしてその方向性は間違っていないかった。新左翼の内ゲバに辟易していた学生たちは、私たちの「内ゲバ主義反対」「大衆的実力闘争へ」というスローガンのもとに結集してきた。その意味では、七〇年代後半の三里塚闘争の高揚を準備したのは、内ゲバを揚棄する闘いでもあった。対立党派との「戦争」に戦力を割かれた内ゲバ党派には、大衆的な実力闘争が担えるはずもなかった。

一九七七年四月の三里塚現地集会への大衆的結集とそれまでの機動隊の規制をスクラムデモで完全に突破した闘い。そして二月要塞と三・二六管制塔占拠の闘いを通じて、一九七八年は反戦・全共闘運動の高揚とその後退のサイクルの突破をかけて、青年労働者運

動と学生運動の再組織化を図る突破口を作りだすものとなった。この闘いが、全共闘運動が敗北した後の、「内ゲバの時代」に終止符を打つ転換点だったことは間違いないだろう。(※次号では、三里塚闘争と戸村選挙から連帯する会の結成、そして青年学生共闘の形成による、開港阻止闘争・管制塔占拠について詳述したい)。

一九六八年革命と

内ゲバ主義の克服（後編）

三里塚三・二六開港阻止闘争はいかに組織されたか

国富建治

（週刊「かけはし」編集委員会）

全共闘運動の終焉と
「内ゲバ」の戦略化

本誌前号で、一九七〇年代前半の三里塚闘争が果たした役割についてふれた。

ここで前号との若干の重複もあるが、

当時の時代背景をもう一度簡潔に説明したい。

一九六〇年代後半の全共闘・反戦青年委員会の運動の高揚に示される新左翼の運動は、一九七〇年代に入ってから、とりわけ中核派と革マル派の間での党派闘争が、相互の目的意識的な殺

害にいたる「内ゲバ」へと全面的にエスカレートすることによって、ぬきさしならない段階へと入っていった。その後、この殺害をも意図した党派間の肉体的暴力の応酬は、解放派（革労協）・革マル派間で、あるいは解放派の分派間でも拡大することになった。

一九七〇年を前にしたベトナム反戦運動と結びついた一九六八年の青年・



第四インターの闘い

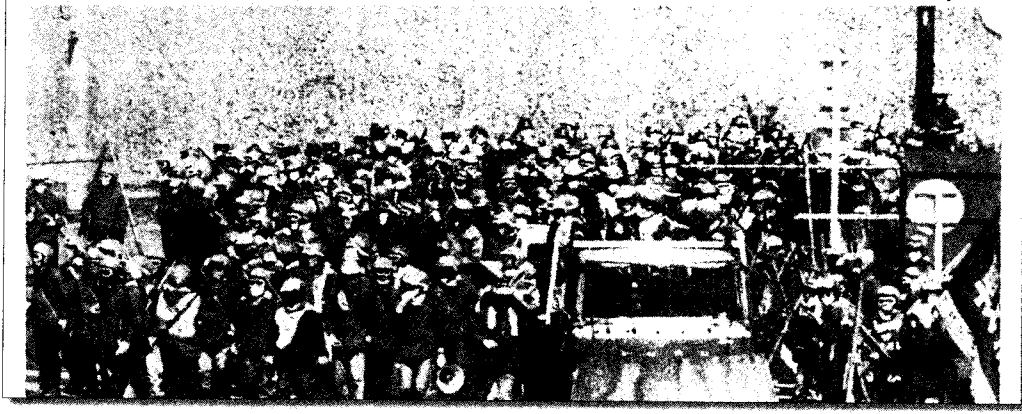
学生たちの大衆的反乱が、フランスをはじめとした欧州やアメリカと比べても急速にその勢いを削がれていったのは、権力の弾圧や、運動サイクルには還元されない要素、すなわち権力との闘いよりも、多くの場合、対立党派間のゲバルト（自治会利権の防衛・奪取などの要因も含めて）に走っていったことに大きな要因があった、と私たちは主張してきた。

とりわけこの「内ゲバ」が新左翼諸派の最大党派間で展開されたものであったからこそ、そのマイナスの影響力は深刻だった。

先号でも触れたが、大衆運動の復権のためには、「内ゲバ」を行使し、あるいは容認するあらゆる党派、思想との闘いをあいまいにしてはならないという教訓は、早大闘争を通じて私自身にとつても忘れられない経験として刻み込まれた。

全体としてのニューレフト的運動が、一九六八年〜六九年を頂点にして衰退

青学共闘最先頭に 三月開港を完全粉砕 日本階級闘争史に輝く勝利



―に、私たちは全力で取り組み、私自身をふくむ多くの逮捕・起訴者、負傷者を出しながら、その試験に合格したと言えるだろう。ここでの経験が、三里塚の農民たちの信頼を勝ち取り、一九七四年の戸村参院選、そして一九七八年の開港阻止決戦へと上り詰めていく基礎となった。

一九七四年の戸村参院選

大きなポイントが、三里塚芝山連合空港反対同盟の戸村一作委員長を候補者として擁立した一九七四年の参院選挙戦だった。この一九七四年の戸村参院選こそ、一九六八〇九年を頂点とした全共闘運動と反戦青年委員会のラディカルな闘いをベースにして、社会党・共産党に替わる新左翼潮流が、全国政治の場に登場しうるかをかけた挑戦だった。

三里塚空港建設反対の農民運動は、農民自身の土地を武器にした闘いを通じて、国家権力と資本に正面から実

力に対決し、跳ね返し、資本の支配そのものに異議を突き付ける闘いだった。一九七一年の二月、七月、九月の連続した実力闘争は、一九六八年〇六九年の「全共闘」運動や反戦青年委員会の青年労働者運動の政治的・社会的発展の方向性を提示していくものだった。

三里塚の農民闘争が、共産党や社会党の裏切り・離反に抗して、新左翼政治潮流と意識的に結びついた経験はまさしく、六八〇六九年反乱の、次の政治的可能性を切り拓くものだったと言わなければならない。

一九七四年、三里塚芝山連合空港反対同盟の戸村一作委員長を擁立した参院選挙は、こうして、六八年〇六九年の青年・学生の反乱が、社会党・総評ブロックの最左派としての反戦派青年労働者運動と結びつき、さらにそこから社会党・共産党に代わる政治潮流へと飛躍していくための試金石だった、と言える。本来ならば、この戸村参院選は、当時の新左翼の最大党派だった

中核派が中心になるべき課題だったろう。しかしすでに革マル派との全面的「内ゲバ」戦争に入っていた中核派(中核派の書記長・本多延嘉氏が革マル派に虐殺されたのは一九七五年三月)にとつてそれは不可能となり、それは多くの部分で、中核派に比べてはるかに少数派だった第四インターがかなりのところを引き受ける結果となった。

一九六〇年代後半の全共闘運動と結びついた全国反戦青年委員会運動の党派的分断以後、左派労働運動の結合体となっていた「全労活」全国労働組合活動家会議」を舞台に、戸村一作三里塚芝山連合空港反対同盟委員長を、一九七四年参院選の候補者として出馬を要請する「申し入れ」(一九七三年八月に各地区労活の二三人の代表的人格の連名で出されている)が行われ、それをめぐった論争が行われている。

当時の『情況』誌には咲谷漢の名で「大衆闘争の現状とへ戸村選挙」実力闘争の継承・波及をこそ」と題した、

全労活の中心的メンバーによる戸村氏立候補を要請する申し入れを正面から批判した論文を掲載している。

咲谷は次のように述べている。

「……我々は今回の戸村選挙を拒否することは、選挙嫌いや原則主義党派の仕事ではなく、まさしく大衆による大衆的政治事業なのだを確認したい。だからこの拒否は、彼らの提起する『政治』から身を避けることによつてではなく、我々自身の闘いの政治性を意識的・積極的・積極的に形成することをもつてなされるべきではない。だからこの拒否は、彼らの提起する『政治』から身を避けることによつてではなく、我々自身の闘いの政治性を意識的・積極的に形成することをもつてなされるべきではない。それはおそらく、戦線の現状に対して一つの大きな混乱と思想的分解をもたらすであろうが、我々は大衆や党派の『おくれた部分』に歩調をそろえるのではなく、自らの政治的性格を自覚する部分の意識的連携によつて、

この混乱を革命的混乱として克服せねばならない。

ここに於ける「政治性」がどのような表現されたかは、残念ながら不明であるが、「戸村一作と三里塚闘争に連帯する会」の選挙に全力で取り組んだわれわれを含む党派、活動家の中からこそ、三里塚開港阻止決戦における「管制塔占拠・開港阻止」を実現した闘いが作りだされたことは、改めて強調するまでもないだろう。そこにおいてこそ鮮明な政治性が行動を通じた選択として表現されたのである。

実際、総評民同の統制を突き破った形で、第四インター派の拠点地域だった宮城では、全電通宮城県支部、動労仙台支部、宮城合同労組、登米地区労働者連帯闘争委、「全金山山支部などを含めた「玉宮城ゼネスト貫徹共闘委」が結成され、「もう一つの地区労」的連帯行動が行われた。

第四インター派は、一九七四年の参院選に向けた政治方針論文で次のよう

に述べていた。

「労働者人民大衆は、歪曲されたブルジョア選挙であろうとも、この機会を通じて体制と全国政治に対して最大の関心を寄せる。ブルジョア選挙に批判的な立場を持ち、棄権することも、その一つの表現である。このように、全労働者人民が重大な関心を寄せる広い政治の舞台に無理して目をつぶって革命的潮流を形成しようなどということとは、夢想のかぎりではない。……それゆえ、なによりもまず第一にすべて先進的闘士たちは、新しい出口を求めている多くの労働者人民に対して大胆に『反帝・社会主義の労働者・農民の政府』を提起して、彼らを政治的に統一した一つの潮流として形成させねばならない。戸村一作の呼びかけ、戸村一作の当選をめざす運動の呼びかけは、社共から離反しつつあるがまだ政治的表現をとっていない多くの労働者人民を一つの政治潮流として形成する闘いである」（『世界革命』一九七四年

六月一日号）。

一九七八年 三里塚開港阻止決戦

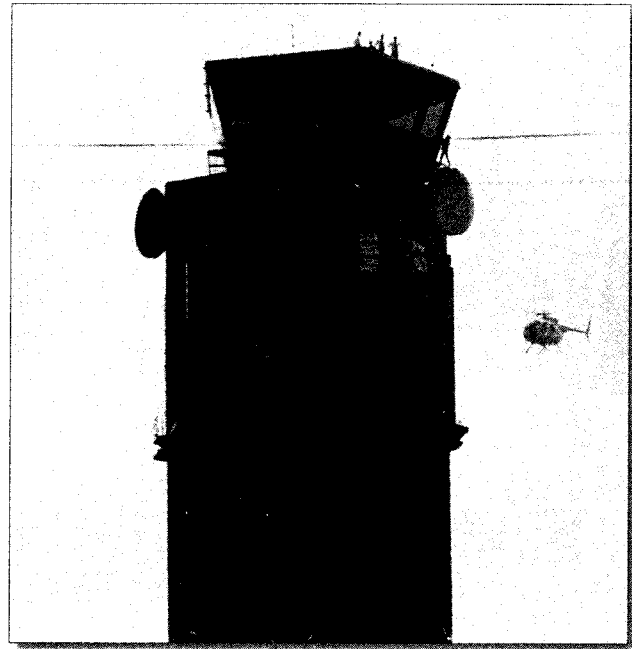
このようにして戸村参院選闘争は、翌一九七五年のベトナム・インドシナ革命をも国際的背景にしながら、一九七八年の三里塚開港阻止決戦にいたる一つの流れを方向づけることになった。

この戸村参院選における共同戦線の形成は、一九七五年から一九七八年にかけて私たちの時代認識を形成し、一九七八年の三里塚開港阻止決戦の勝利を手繰り寄せた前提条件だった、と言うべきだろう。一九七四年の戸村選挙の成果の上でこそ、一九七八年の三里塚を「決戦」として推進する意識的土台が形成されたという事実を、改めて確認しなければならない。こうしてわれわれは、三里塚開港阻止を目標にして、「内ゲバ」主義を批判・克服し、戦闘的大衆運動潮流、「労働情報」に表現される新しい労働運動勢力の形成

にも取り組んでいった。それは当時の私たち第四インター派にとって、身に余る挑戦だったが、今から考えれば必死の思いで、この慣れない活動に取り組んだのだと思う。

私たちにとつてもう一つの重要な経

験は、この過程で、すでに触れたことだが革マル派・中核派に代表される日本新左翼の度し難い「内ゲバ」主義との対決を、現実の大衆運動の中で実現しようとしてきたことであつた。前号で書いたように一九七二年の早稲田大



学における川口大
三郎君への革マル
派によるテロ・リンチに対して、「早大民主化」を掲げた革マル派の暴力支配への闘いを、一九七三年のほぼ一年間にわたつてさまざまな形で防衛してきた活動は、その実践であつた。早大のみならず多くの大学キャンパスで、われわれは日本新左翼諸党派に浸透してい

た「自治会利権防衛」のための党派による暴力支配の構造を、徹底的に批判した。
大阪市などでは、革マル派による中核派活動家へのリンチを休を張つて阻止する闘いも経験した。

三・二六「管制塔占拠闘争」の勝利

一九七八年の「管制塔占拠」の闘いは、一〇年前の全共闘運動の経験の上に、一九七〇年代いつばいを通じた共同戦線と潮流形成への一つの結論だった、ということが出来る。私たちの一九七〇年代における一連の取り組みは、一九六〇年代末の「全共闘」経験とベトナム反戦運動（あるいはベトナム・インドシナ革命連帯運動）を、三里塚「開港阻止決戦」をベースにして次の時代につないでいこうとする挑戦だった。現実の具体的な攻防を通じて、個々の闘いの中から普遍的な要素をつかみ取り、それを広げ、発展させるために意識的な努力を行うことは、これから

も折に触れて、挑戦していくべき課題であろう。

戸村一作氏を押し立てた一九七四年の参院選闘争は、一九七一年の三里塚における攻防を継承しようとするものだったし、戸村参院選自身も一九七〇年代におけるさまざまな共同戦線の模索も一九七八年三月の開港阻止決戦の民衆的勝利にとつて不可欠の挑戦だった、と私たちは考えている。

開港阻止決戦からすでに四〇年以上が経過した。しかし三里塚闘争を、象徴的な日本の反権力闘争として記憶にとどめている人も少なからずいることは事実だ。私たちは昨年三月、一九七八年三・二六管制塔占拠闘争四〇年の記念集会を開催したが、この闘争の教訓は、これからも継続して論じられるべきだろう。過去の回想ではなく、現在の挑戦として。

る。米国ではトランプによる「アメリカ・ファースト」の場当たり的政策運営に対して、「社会主義」を支持する若者たちが登場している。それは二〇一六年の大統領選挙で民主党の大統領候補として「社会主義」を唱えるバーニー・サンダースが健闘したことに示されている。イギリスでも労働党左派のジェレミー・コービン党首を支持する動きが、とりわけ若者たちの間で顕著だ、とされている。

言うまでもなくこれらの事例は現在のところ「兆候」に過ぎない。しかしささやかな「兆候」の下に、どのような地殻変動が生じうるのか、その潜在的可能性に注意を払うことも私たちにとつて大切なことではないだろうか。「社会主義」への時ならぬ注目が、一時のエピソードではないほどに、グローバルな現代資本主義の矛盾は幾重にも積み重なっているに違いない。現代資本主義の構造的な不安定性は、明らかになっている。その危機の解明は、

社会主義は依然として現代の挑戦課題である

現在の挑戦として私たちは、何を考えることが出来るだろうか。国際的なレベルで言えば、私たちが直近の問題として見ているのは、香港の刑法違反



装甲トラック、管理ビルに突入

私たちの身に余る行為であることは間違いだが、私たちは「運動」の体験と言う点で、多くの教訓を身に付けているはずである。

たとえばフランスの「黄色いベスト」運動をどう見るのか、あるいはベルギーの中学生たちの「気候変動」への抗議をどう考えるか。そして香港での「中国への容疑者引渡し法案」に反対する一〇〇万人単位の圧倒的なデモの波……

二〇一一年の東日本大震災と福島原発事故、沖縄における持続的な反米軍基地闘争のうねり、そして安倍一トランプ同盟の行方と憲法九条改悪、米中関係、さらには朝鮮半島情勢の急転の可能性など……。さらに環境危機は、すでにヨーロッパの中学生たちの運動を触発している。

一見安定しているかに見える社会の日常と、人びとの意識は、明日への不安の中で急速に変動しうることも事実だ。私たちは「不確定な現実」に安住

容疑者を中国本土に送致し、中国の法律で裁くよう強制する法案を、一〇〇万人以上の市民、とりわけ一〇代から二〇代前半の若者たちが主力になって阻止した闘いである。

現在、米国でも欧州でも、若い世代の運動的活性化の兆しが報じられてい

することなく、変革の仮説を現実のささいな兆候から慎重に選び取っていく感覚を磨いていくことが、今まさに問われているのだと考える。人びとは再び「根本的変革」に挑戦せざるをえないのだ。

私たちの世代の活動家は、一九六〇年代の後半から七〇年代の初めにかけて「世界の変革」に目覚め、多くのことを経験し、幻滅し、また革命の可能性に挑戦し続けてきた。

今、必要なことは、その経験を自覚的に語っていくことであるはずだ。そのためにこそ国際的な経験の共有と世代間の討論が何よりも求められている。なんとも大変な仕事ではあるが、可能なかぎりチャレンジしようという気持ちに変わりはない。社会主義は、依然として私たちの課題であり続けている。

(了)